

地域におけるお話会とストーリーテリング

—おはなしつむぎの会の活動から—

鈴木 守, 山田いづみ*

Story Hour and Story telling
“KATARI” by OHANASHI TSUMUGI NO KAI

SUZUKI Mamoru, YAMADA Izumi

2021年11月5日受理

抄 録

本研究は、ストーリーテリングやお話会の取り組みについてや、地域における意義について考察するために、静岡県西部地域において「昔話を中心とした語りの活動」を行っている「おはなしつむぎの会」の取り組みについて検討を行った。お話やストーリーテリングは日本の公共図書館や学校図書館において子どもへの読書への導入等を目的として実施され、子どもに読書への興味関心を持ってもらう取り組みとして期待されている。「おはなしつむぎの会」の取り組みから、地域の伝承を再話する必要性と、大人にとってお話会やストーリーテリングが意義あることであることを示した。また、お話会やストーリーテリングの図書館における位置づけについて、従来のような児童サービスの範疇にとどまらず、1) 生涯に渡る読書と学び、2) 地域における伝承等の保存、3) 図書館と住民との協働による地域の読書や学びにつながる可能性を指摘した。

キーワード：読書活動 ストーリーテリング 語り 昔話 おはなしつむぎの会

目次：

- 1 はじめに
- 2 図書館分野におけるお話会とストーリーテリングについて
- 3 耳からお話を届けたい—おはなしつむぎの会の活動について—
- 4 まとめにかえて

* 浜松市役所

1. はじめに

子どもの読書への関心を高める取り組みとして、公共図書館や学校、児童館等においては、読み聞かせとともに、お話会やストーリーテリングが行われてきた。図書館において、お話会とは“子どもを対象にストーリーテリングを行う集い”とされる。¹ また、ストーリーテリングとは“語り手が物語を覚えて、聞き手に語ること”“図書館では、公共図書館や学校図書館で子どもを対象に図書館員や教師が物語を語ること”とされている。² また、“語り手が物語を暗記し、本を見ずに子どもに聞かせるもので、子どもは頭の中でいろいろな場面を想像しながら聞くことができる”とされる。³ さらに、お話（ストーリーテリング）は“語り手が昔話や創作された物語を全て覚えて自分の言葉で語り聞かせ、聞き手がそれを聞いて想像を膨らませる活動である”“直接物語を聞くことで、語り手と聞き手が一体になって楽しむことができる”とされる。

図書館関係の雑誌においても、例えば児童図書館研究会の『こどもの図書館』誌⁴、全国学校図書館協議会の『学校図書館』誌、⁵ 図書館問題研究会の『みんなの図書館』誌⁶ においてはストーリーテリングに関する記事や特集が掲載されている。地域の公共図書館や学校図書館においてストーリーテリングやお話会が実施されているが、もちろん図書館に限定されるものではない。地域において、ボランティアの方々や様々な団体がストーリーテリングやお話会を行っている。



図1 おはなしつむぎの会のお話会

本研究の目的は、静岡県西部地域において「昔話を中心とした語りの活動」を行っている「おはなしつむぎの会」の活動を通して、地域におけるお話会やストーリーテリングの取り組みの意義を明らかにすることである。本稿では、第2章において、図書館分野におけるストーリーテリングやお話会について確認し、第3章では、「おはなしつむぎの会」の「昔話を中心とした語りの活動」を明らかにする。⁷ 第4章では地域におけるお話会やストーリーテリングの取り組みの意義を明らかにする。

(鈴木 守)

2. 図書館分野におけるお話会とストーリーテリングについて

本章では、図書館の分野におけるお話あるいはストーリーテリング、およびお話会について、図書館情報学分野の専門辞典の内容から確認してみる。

まず「お話」について、『最新図書館用語辞典』では、“昔話や創作童話など、自分が感動して他に語り伝えたいと思う物語を覚えて語ること…語り手と聞き手が対面して、生の声で語り聞かせるのが原則である”とされている。また、「お話」は、“公共図書館の児童室・地域文庫・家庭文庫・学校などで、読書への導入手段として用いられている”とし、“昔話は児童文学の原点となり、そこからグリム兄弟やアンデルセンが生まれ、また欧米で児童図書館員に必要な技術とされるストーリーテリングも生まれた”と説明されている⁸

ストーリーテリングについては、『図書館情報学用語辞典 第3版』では、“語り手が物語を覚えて、聞き手に語ること”とし、“図書館では、公共図書館や学校図書館で子どもを対象に図書館員や教師が物語を語ることを指す”と説明している。また、“日本では、公共図書館で行われるお話会の中で、読み聞かせや紙人形劇とともになされることが多い…いずれも子どもたちに読書に対する興味を持たせることを目的とする点では共通している”としている。⁹ 一方、『最新図書館用語大辞典』では、“物語を覚えて子どもたちに対して語ること”として、“文字を十分に読めない子どもでも物語を楽しむことができるので、児童図書館・地域文庫・家庭文庫・学校などで、読書への導入手段として用いられる”とし、“おはなしの後で本の紹介を行い、読書への導入を図る”と説明されている。¹⁰

お話会については、『図書館情報学用語辞典 第3版』では“児童図書館で子どもを対象にストーリーテリングを行う集い”とし、“お話会の意義として、子どもに対して読書する素地を作る、本への興味を育てることのほか、図書館員と子どもの関係を育てる、図書館員のストーリーテリングの訓練があげられる”と説明している。¹¹ また、『最新図書館用語大辞典』では、お話会を“子どもたちを集めておはなしを聞かせる集まりのこと…図書館の子どもに対するサービスの一つとして行われる…地域文庫活動の中に取り入れているところも多い”とし、“図書館の子どもに対するサービスの中でおはなしを聞かせることは基本的な仕事の一つである”としている。さらに、“おはなし会は、(1)子どもと本の世界を自然に楽しく結び付ける手段として、(2)

図書館や図書館員に親しみを持ってもらえる機会として、子どもに対するサービスの中で大きな意味を持つものである”としている。¹²

このように、図書館分野の辞典等における記述から、日本の図書館におけるお話会やストーリーテリング（お話）は、児童サービスの中に位置づけられており、図書館員等から子どもたちに語ることによって、子どもたちへ読書への導入を図るものと考えられてきたことが明確となる。

（鈴木 守）

3. 耳からお話を届けたい—おはなしつむぎの会の活動について—

お話を子どもたちに届けるためには様々な方法が考えられる。家庭では大人が子どもに「絵本の読み聞かせ」をしたり、保育園や幼稚園、学校など聞き手が大勢の場合は「お話会」を開いて、「絵本の読み聞かせ」や「紙芝居」や「語り（ストーリーテリング）」を通してお話を子どもたちに届ける。図書館において、お話会とは“子どもを対象にストーリーテリングを行う集い”とされるが、実際には多くの図書館の「お話会」では絵本の読み聞かせが主に行われている。絵本の読み聞かせを中心にしたお話会が多い中、おはなしつむぎの会が行うお話会は全て「語り」でプログラムを構成し、絵本の読み聞かせは行わない。長年「語り」をしている「おはなしつむぎの会」の活動を通して、今の時代に耳からお話を届けることの意義について考察してきたい。

「語り」は「ストーリーテリング」とも言われるが、語り手がお話を覚えて、聞き手に語ることをいう。松本なお子氏は「これから昔話を語る人へ—語り手入門」という著書の中で、「語り」と「読み聞かせ」を比較して次のように説明している：

「語り（ストーリーテリング）」は文字通り「お話（ストーリー）を語る」ことです。お話は事前にすっかり覚えて、語る時は本やテキストを手を持ちません。楽器や小道具を使うこともしません。お話だけを淡々と語ります。一方、「読み聞かせ」は、絵本を手を持ち、絵を聞き手に見せながら、読み手が文章を読みます。¹³

このように「読み聞かせ」の場合、聞き手は絵本の絵を見て、読み手は絵本の文字を見ている。聞き手は耳から文章を聞きながら、その文章とぴったり合った絵を目で見てお話を理解し、楽しむ。絵の助けなしに耳から聞いた言葉だけでお話をイメージする力は子どもに最初から備わっているものではない。子どもの成長過程で体験を積んだり、絵本の読み聞かせなどで絵に助けられながらお話を楽しむ経験を積み重ねていくうちにだんだんと耳から聞いた言葉だけでお話をイメージできるようになっていく。

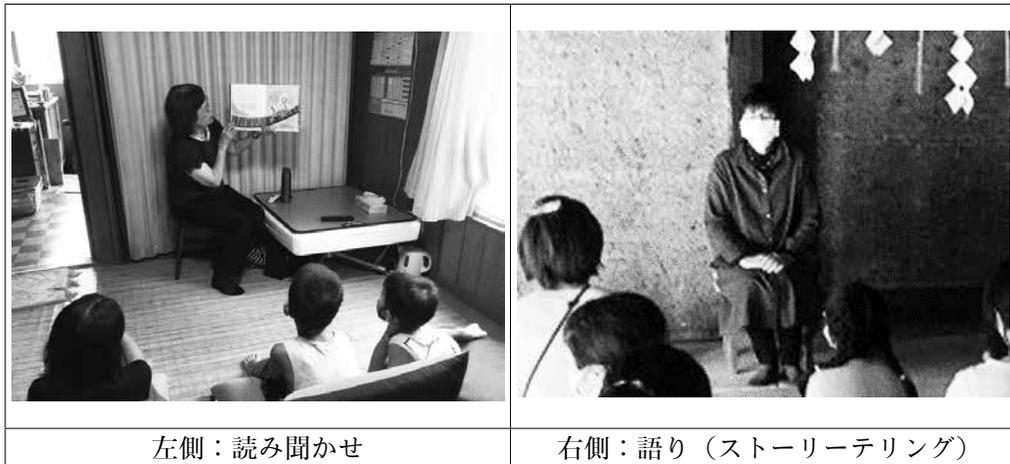


図2 読み聞かせと語り（ストーリーテリング）

「語り」の場合、語り手は昔話や創作などのお話を覚え、自分のものにして、生の声で聞き手を見ながら語り聞かせる。そのため語り手のイメージをそのまま聞き手に伝えると同時に、聞き手の反応を受けとめている。お話は語り手と聞き手がお互いに働きかけて作っていくものなので、いつもうまくいくとは限りらない。しかし、もし語り手と聞き手の呼吸がぴったり合った時には「一緒にお話を楽しんだ」という満足感はとても大きい。「語り」は、お話の長さが短いから聞ける、長いから聞けないというものではない。語り手は、お話会に集まる聞き手の年齢や経験、つまりお話を聞き慣れている子たちなのか、または初めてお話を聞く子たちなのか、子どもの経験値に合ったお話を選ぶことが大事とされる。語ろうとしている「お話」が「よいお話」でも、その聞き手に合っていないければ、聞き手にとって「よいお話」にはならない。

松岡享子氏は著書の中で「ストーリーテリング」と「お話」と「語り」について説明する：

子どもを相手に仕事をする図書館職員の間で、お話のことが最初にとりあげられたとき「お話」ということばは使われず、「ストーリーテリング」ということばが使われました

（中略）

お話を、図書館で、子どもを本に結びつけるひとつの手だてとして行うという考えは、アメリカで生まれ、広まったといっているでしょう¹⁴

それに影響され、図書館では「ストーリーテリング」ということばが使われているが、おはなしつむぎの会では図書館に限らず、地域においてもお話を語っていくことから「語り」ということばを使っている。ストーリーテリングという言葉が日本に入ってきたのは1960年代のことで、アメリカで図書館学を勉強してきた人たちによって日本に紹介され、1970年代に公共図書館や家庭文庫において、広がっている。けれ

ども、ストーリーテリングという言葉が日本に入ってくる前から、昔話や伝説などのお話は日本全国各地で、人の口から口へと語り継がれていた。肩が触れあうほどの距離でお話の楽しみを共有する時間は、とりわけ子どもにとっては楽しみでもあり、お話から人生を学ぶ貴重な機会でもあったのだ。ところが、この語りの習慣は今ではほとんどなくなっている。語り手自身が高齢で語れなくなってきたり、亡くなられたりし、語り手が減少している。また、生活が便利になっていく一方で、子どもも大人もとても忙しくなった。そして、テレビやゲームなどのマスメディアも発達し、とても刺激的でもある。囲炉裏にあたりながら昔話を聞く語りの場も減少している。このような現代の状況だからこそ、語りが求められ、語りのもつ意義が高まっているのではないかと考える。

お話を語る語り手には、伝承の語り手と現代の語り手がいる。減少しているのは伝承の語り手である。伝承の語り手は、子どものときに聞いたお話を思い出してその通りに語るのだが、私たち現代の語り手はお話を本（テキスト）から、選び覚えて語る。伝承の語り手は耳からお話を覚えたのに対して、現代の語り手は目からお話を覚えることになる。そのため、現代の語り手は、まず、よいテキストを選び、テキストに忠実に覚えることが基本となる。語りの初心者の方が勝手に文章を変えてはならない。そしてお話を覚えるときには、お話の場面を頭の中に描き、言葉は自分に語り聞かせるよう声を出して覚える。ここで耳からお話を確認するのだ。

現代の語り手の一例として、実際に語りをしている「おはなしつむぎの会」を紹介する。「おはなしつむぎの会」は、浜松昔ばなし大学受講生の有志により「浜松ストーリーテリング研究会」として1997年5月に発足した。昔ばなし大学の講師は小澤俊夫氏。ここで私たちは昔話の特徴や語るためのテキストの選び方、語り継いでいくことの大切さを学んだ。会の発足当初はテキストの検討と語りの実習が主な活動だった。2007年5月「おはなしつむぎの会」と改名し、現在会員数は10名。会員は個別にそれぞれ活動の拠点をもち、お話を語っている。「おはなしつむぎの会」としての主な活動は次の通り：

- ① 浜松市博物館での「かやぶき屋根の下で聞く日本の昔話」
（2006年6月から15年間続けている）毎月第2土曜日 午後2時から（およそ30分間）蛸塚公園内の江戸時代古民家「旧高山家」を会場に日本の昔話を毎回5話程度語る。対象は子どもから大人まで。参加者は親子連れが多い。5月に親子で語りを楽しんだ母親は「子どものころ『食わず女房は』は怖い話と思っていたが、今日久しぶりに聞いて懐かしく涙が出るほど嬉しかった。人からお話を聞くことがこんなに楽しいとは知らなかった。子どもが絵本を読んで欲しがる気持ちがよくわかった」と感想を述べた。
- ② 浜松市内の保育園・小学校・中学校・放課後児童会・図書館などのおはなし会
- ③ 自主開催による年3回（弥生・水無月・霜月）のお話会
お話会は二部構成で行い、前半に小さい子向き（4歳くらいから）のお話会、

後半に大きい人向き（10歳くらいから）のお話会をしていて、大人は両方聞くことができる。

- ④ 定例会 月1回、お話会の打ち合わせや反省、テキストの検討、語りの実習を行う。



図3. お話会が行われた「かやぶき屋根」（浜松市立博物館 旧高山家）

おはなしつむぎの会では、地元には伝わるお話を語り伝えたいと「遠州七不思議」の再話をした。「遠州七不思議」とは静岡県の遠州地方に伝わる七つの不思議な物語のこと。七不思議の組み合わせには諸説あるが、合わせると七つ以上存在する。おはなしつむぎの会では①「三度栗」、②「小夜の中山夜泣き石」、③「浪小僧」、④「無間（むけん）の鐘」、⑤「片葉の葦」、⑥「桜ヶ池のおひつ納め」、⑦「京丸ぼたん」の七話を再話した。再話とは昔話や伝説などを今の子どもたちにわかるよう言葉や形を整える作業のことをいう。定例会では原話を集め、語りに向けた文体に整え、実際に覚えて、語り、耳から聞いて再話を確認するという一連の作業を、会のメンバーで行っている。令和元年には「大人のためのおはなし会」として浜松市内の複数の図書館で遠州七不思議を中心に大人向けのお話会を行った。そこでは、「新聞を見て知った。『遠州七不思議』を聞きたくて来た」「自分の知ってる『遠州七不思議』とは話が少し違った」という男性の参加者が目立ち、また、若い人からは「浜松に住んでいるがこのようなお話が伝わっていたとは知らなかった」といった感想が寄せられた。「次、いつやるのか」の問い合わせが多かったため、令和3年11月に図書館で「大人のためのおはなし会」を予定している。

お話会を行う場合、絵本や紙芝居は聞き手の人数に限りがある。絵が見えなければ、その楽しさは半減してしまうからだ。けれども、お話は語り手と聞き手がいれば、何の準備もなくても（例えば、絵本がなくても、明るくなくても、眼鏡がなくても）どこでも始められる。寝る前の子どもにも、幼稚園や学校の教室の子どもにも、バスの中でも、屋外でも、介護施設であっても。語り手のものになったお話は、いつでも、



霜月おはなし会

2019年11月24日(日) 福祉交流センター21会議室 10時～11時30分



【小さい子向】

1. ひなどりとネコ (古橋)
出典：子どもに聞かせる世界の民話 実業之日本社
2. かちかち山 (山崎)
出典：日本の昔話4 福音館書店
3. 小人とくつや (鶴見)
出典：子どもに語るグリムの昔話6 こぐま社
4. 三びきのこぶた (松本)
出典：イギリスとアイルランドの昔話 福音館書店

【大きい人向】

1. スイショウの国の妖精 (山田)
出典：子どもに聞かせる世界の民話 実業之日本社
2. 片葉の葎 (大橋)
参考：遠州の伝説集 遠州出版社
3. 貧乏神 (柴田)
出典：日本の昔話5 福音館書店
4. 十二のつきのおくりもの (松本)
出典：おはなしのろうそく2 東京子ども図書館



主催：おはなしつむぎの会

図4 お話会のプログラム

どこでも、その語り手が語ろうとすれば聞き手に届けられる。

語り手はお話を耳に届けるだけでなく、目を見て語ることでアイコンタクトもとっている。おもしろい場面で聞き手が大笑いをしている時は少し待ったり、こわい場面では一緒に息をのんだり、聞き手同士が顔を見合わせたりすることもある。そのため、同じ語り手が語っても、聞き手によってそのお話の所要時間が変わることもよくあることで、覚えたお話を一方的に語っているのではない。それが、生の声で語るとい

ことなのだ。

おはなしつむぎの会ではこれまで子どもたちに耳からお話を聞く楽しさを届けたいと活動をしてきた。子どもの経験値とお話があれば、子どもはお話をよく聞く、というのはこれまで語ってきた経験から確かなものだ。ところが、「大人のためのおはなし会」を開催することにより、大人にもお話を耳から聞く楽しさを体験してもらうことにはとても意義があることだとわかった。大人であっても聞き慣れていないとお話を耳だけで聞きとるのは大変なことであり、むしろ、子どもより大人の方が「お話をただ聞いて楽しめばよい」ということに戸惑いを感じるように見受けられた。しかしそれは最初だけで、少し慣れれば大人もお話を楽しんで聞けるのに、大人は子どもよりお話を聞く機会が少ない。大人にも語りを「聞き手」として楽しむ機会をもってもらい、さらには、これから子どもにお話を語ってみたいと思う大人が増えていくことが子どもにお話を届ける機会を増やすことにつながるということがわかった。

私たち語り手にとっては、お話を語ることによって、昔話の持つ力、生の声の持つ力を再確認し、語り継ぐことの重要性を改めて学ぶ機会となった。

これからも、子どもが楽しめるお話、大人（高齢者）が楽しめるお話のレパトリーを増やし、そして、語りを聞ける場を増やし、多くの人の耳にお話を届けていきたい。¹⁵

浜松市立南図書館・浜松市立北図書館・浜松市立東図書館・浜松市立南陽図書館・浜松市立雄踏図書館
5館連携事業

大人のためのおはなし会

「遠州七不思議と昔話の語り」

浪小僧 小夜の中山夜泣き石 桜ヶ池のおひつ納め
京丸ぼたん 無間の鐘 三度栗 片葉の葦

知っているよ)で知らない、地元で伝わる遠州七不思議。
地元の語り手が語ります。

※遠州七不思議(2話程度)と大人向け昔話を語ります。各館で内容が異なります。

| | |
|-----------------------------------|---|
| 〈南図書館〉 TEL053-452-1655 | 令和元年10月 5日(土)10時～ ※京丸ぼたん、浪小僧 他 |
| 〈北図書館〉 TEL053-436-6646 | 令和元年10月 6日(日)14時～ ※三度栗、浪小僧 他 注意※会場は北部協働センターです(図書館ではありません) |
| 〈東図書館〉 TEL053-464-2081 | 令和元年10月 13日(日)10時～ ※小夜の中山夜泣き石、三度栗 他 注意※会場は南陽協働センターです(図書館ではありません) |
| 〈南陽図書館〉 TEL053-426-1000 | 令和元年10月 26日(土)10時～ ※片葉の葦、小夜の中山夜泣き石 注意※会場は南陽協働センターです(図書館ではありません) |
| 〈雄踏図書館〉 TEL053-596-5522 | 令和元年10月 27日(日)14時～ ※無間の鐘、三度栗 他 |

※語るお話は予定です。変更をすることもありますので、ご了承下さい

※詳細は各図書館の館内ポスター、電話にてご確認下さい
指定管理者：NPO法人ふくろうの森委員会・東海ビル管理(株)共同グループ

図5. 大人のためのお話会「遠州七不思議と昔話の語り」の案内

大人のたためのお話し会 「遠州七不思議と昔話の語り」

〈浜松市立南陽図書館の会〉

(日時)令和元年 10月26日(土)10時～
(場所)南陽協働センター1階講座室
(語り)おはなしつむぎの会

遠州七不思議

1. 小夜の中山夜泣き石 『遠州七不思議』 玲風書房
(鶴 見)
2. 浪小僧 『とんとむかし』 昔ばなし研究所
(古 橋)
3. 片葉の葦 『遠州伝説集』 遠州出版社
(大 橋)

昔 話

4. 二度咲く野菊 『日本の昔話4』 福音館書店
(鶴 見)
5. さるかにかっせん 同名絵本(参考) くもん出版
(大 橋)
6. フォックス氏 『子どもに語るイギリスの昔話』 こぐま社
(柴 田)



問い合わせ：浜松市立南陽図書館
〒430-0825 浜松市南区下江町462 TEL: 053-426-1000
指定管理者：NPO法人ふくろうの森委員会・東海ビル管理(株)共同グループ

図6. 大人のたためのお話し会「遠州七不思議と昔話の語り」のプログラム
(山田いづみ)

4. まとめにかえて

本研究は、地域において読書への関心を高める取り組みのあり方について考えるために、浜松市など静岡県西部地域において、「昔話を中心とした語りの活動」を行っている「おはなしつむぎの会」の取り組みについて検討を行った。

「おはなしつむぎの会」による活動を通して、次の点が明らかとなった。

第1に、「おはなしつむぎの会」による『遠州七不思議』の再話については、地域になじみのあるお話はその地域の人が語り伝えていかなければ消えてしまう。伝承の語り手が少なくなっているため、語られるお話を耳から聞いて語り継いでいくことは難しい。記録として残されたお話を再話して語っていくことが、これからは求められる。

第2に、大人にもお話を、ということである。これまで「おはなしつむぎの会」は、子どもたちに耳からお話を聞く楽しさを届けたいと活動をしてきた。その活動を通して、子どもの身近にいる大人への働きかけがとても大事であることがわかった。そのためにはまず大人にも語りを「聞き手」として楽しむ機会をもってもらわなければならない。子どもにとって身近な大人、保護者の理解があれば子どもがお話を聞く機会が増えることにつながっていく。

お話やストーリーテリングは日本の公共図書館や学校図書館において子どもへの読書への導入等を目的として実施され、子どもに読書への興味関心を持ってもらう取り組みとして期待されてきた。それが実際に、「おはなしつむぎの会」の活動を通して明らかになったことから、図書館においてお話会やストーリーテリングについて次の可能性を指摘したい。

第一に、子どもを対象とすることにとどまらず、子どもから大人まで、生涯にわたる読書や学びにつながるのではないかという点である。

第二に、図書館にとって、地域における読書活動の支援にとどまらず、地域の文化の伝承を通じた地域の保存図書館としての機能を発揮することにつながるのではないかという点である。

第三に、図書館あるいは児童サービス担当者から利用者への図書館サービスの提供ということにとどまらず、生涯学習施設としての図書館と地域（の住民）との協働による地域の読書や学びにつながるのではないかという点である。

最後に、「おはなしつむぎの会」のお話会に参加させていただき、「語り」を拝聴できる貴重な機会を賜ることができた。会の皆様には、この場をお借りして、お礼申し上げます。

(鈴木 守 山田いづみ)

5. 註および参考文献

- 1 図書館情報学用語辞典 第5版 お話会について同書ではさらに“お話会の意義として、子どもに対して読書する素地を作る、本への興味を育てることのほか、図書館員と子どもの関係を育てる、図書館員のストーリーテリングの訓練があげられる”“お話会は、定期的に開催し、30分位の時間で、10名から30名ほどの子どもたちに1、2話語るのが一般的であり、詩や指遊び、絵本のストーリーテリングなどを入れることもある”としている。
- 2 図書館情報学用語辞典 第5版 ストーリーテリングについて同書ではさらに“日本では、公共図書館で行われるお話会の中で、読み聞かせや紙人形劇とともになされることが多い”“いずれも子どもたちに読書に対する興味を持たせることを目的とする点では共通しているが、読み聞かせが本や絵本を書いてある通りに読んで聞かせるのに対し、ストーリーテリングは語り手が自分の言葉に直して語るところにその特徴がある”“同じ物語でも語り手によって違った味わいを持たせることができ、また、聞き手の反応を見ながら語り口を変えていくことも可能である”としている。
- 3 子どもの(第3次) p.21
- 4 児童図書館研究会『こどもの図書館』誌において、ストーリーテリングに関する以下のようない記事が掲載されている：

石原恵子. 岡山の学校図書館から(17)おはなしの魅力 -- ストーリーテリング. こどもの図書館 51(1), 11, 2004-01; 森岡恵美. 第1分科会報告 ストーリーテリングとおはなし会 -- 耳からの読書をとりとどす(2004年度児童図書館研究会 大阪学習会報告特集). こどもの図書館 52(5), 4, 2005-05 山西朋子. 講演 民話の力・語りで伝えた生ける知恵(2002年度児童図書館研究会福島学習会報告). こどもの図書館 50(5), 11, 2003-05; 工藤千咲. 第5分科会 語りの世界を楽しもう -- 聞いて語って(2002年度児童図書館研究会福島学習会報告). こどもの図書館 50(5), 7-8, 2003-05; 小澤俊夫. 昔話の語り口(1)-(11). こどもの図書館 52(5), 16-17, 2005-05; 52(6), 13, 2005-06; 52(7), 13, 2005-07; 52(8), 13, 2005-08; 52(9), 13, 2005-09; 52(10), 13, 2005-10; 52(11), 17, 2005-11; 52(12), 16-17, 2005-12; 53(1), 11, 2006-01; 53(2), 10, 2006-02; 53(3), 12-13, 2006-03; 児童図書館研究会・学習会報告 ストーリーテリング・ワークショップ アン・ペロウスキーさんのお話の世界へ. こどもの図書館 54(10), 7-9, 2007-10; 児童奉仕の実際(1) ストーリーテリング 講師 内藤直子氏(特集 第28回(2008年)児童図書館員養成講座報告) こどもの図書館 56(2), 6, 2009-02; 下澤 いづみ. ストーリーテリングの現場から (1)-(12) こどもの図書館 56(4), 10, 2009-04; 56(5), 10, 2009-05; 56(6), 10, 2009-06; 56(7), 9 2009-07; 56(8), 10, 2009-08; 56(9), 10, 2009-09; 56(10), 10, 2009-10; 56(11), 10, 2009-11; 56(12), 10, 2009-12; 57(1), 11, 2010-01; 57(2), 11, 2010-02; 57(3), 11, 2010-03; 児童奉仕の実際 ストーリーテリング(特集 第30回(2010年)児童図書館員養成講座報告). こどもの図書館 58(2), 9, 2011-02; 横山 美智子. 会員の本『先生が本(おはなし)なんだね: 語りの入門と実践』伊藤明美/著. こどもの図書館 65(3), 21, 2018-03; 第4分科会 ストーリー・テリング: お話の力を生かすには 報告 福井おはなしの会 助言者 伊藤明美氏(元浦安市立中央図書館司書)(報告特集 2017年度児童図書館研究会全国学習会 福井学習会 本と出合う喜びを: 子どもの育ちを支えるために); 坪内 啓子 こどもの図書館 65(6), 9-11, 2018-06; 小林 いづみ. 第2分科会 ストーリーテリング: 魅力のある「語り」とは(誌上香川学習会 香川学習会 未来へつなぐ こどもと本: 2020 香川) こどもの図書館 67(6), 8-10, 2020-06; 児童図書館研究会 山梨支部学習会 報告 子どもたちに届けよう、本と語り. こどもの図書館 68(2), 5-7, 2021-02
- 5 全国学校図書館協議会『学校図書館』誌において、ストーリーテリングに関しては以下の記事がみられる：

渡辺茂男. ストーリーテリングの実際. 学校図書館 (98), 21-23, 1958-12.; 渡辺 茂男. 読書指導とストーリーテリング 1-4. 学校図書館 (153), 55-58, 1963-07; (154), 55-58, 1963-08. (155), 55-58, 1963-09; (156), 55-58, 1963-10.; 杉山 久夫. 学校図書館運営の基礎知識 -17- ストーリーテリング 学校図書館 (311), p68-69, 1976-09.; 中村 順子. ストーリーテリングのための参考文献・参考資料(ストーリーテリング -- その魅力と実践方法 <特集>). 学校図書館 (505), p43-46, 1992-11; 地域の民話をストーリーテリングで -- 民話の掘り起こしから(実践研究). 学校図書館 (508), p51-56, 1993-02; ストーリーテリング -- その魅力と実践方法 <特集>. 学校図書館 (505), p9-48, 1992-11 学校図書館編集部. 小学校図書館現場を訪ねて -- 千葉県市川市立福栄小学校(ストーリーテリング -- その魅力と実践方法 <特集>). 学校図書館 (505), p37-40, 1992-11; 塚原 博. 学校(図書館)でス

ストーリーテリングを！(ストーリーテリング--その魅力と実践方法<特集>). 学校図書館 (505), p32-35, 1992-11; 森元喜美江. 中学校図書館現場での実践(ストーリーテリング--その魅力と実践方法<特集>). 学校図書館 (505), p25-29, 1992-11; 竹中淑子. その魅力と実践の方法(ストーリーテリング--その魅力と実践方法<特集>). 学校図書館 (505), p17-22, 1992-11; 黒沢克朗. その成立と日本での実践(ストーリーテリング--その魅力と実践方法<特集>) 学校図書館 (505), p9-14, 1992-11

- 6 日本図書館協会『みんなの図書館』誌において、ストーリーテリングに関しては以下の記事がみられる：

竹内 =, 深沢 栄一. ストーリー・テリング・ワークショップへの旅 -1- みんなの図書館 (113), p84-87, 1986-10; 玉目 哲康, 島 弘. ストーリー・テリング・ワークショップへの旅 -2- みんなの図書館 (114), p50-55, 1986-11; 竹内 =. ストーリー・テリング・ワークショップ -3- みんなの図書館 (115), p19-31, 1986-12; 片岡 千晴, 深沢 栄一. ストーリーテリング・ワークショップへの旅 -4-. みんなの図書館 (116), p37-43, 1987-01; 竹内 =. ストーリー・テリング・ワークショップへの旅 (補足版). みんなの図書館 (117), p50-63, 1987-02; 山本宣親. 図書館員がストーリーテリングを語るということ -- 実践から学んだ図書館発展への道. みんなの図書館 (320), 52-61, 2003-12

中学生へ出前ストーリーテリング(上)これまでの体験を通して思うこと; 山本 宣親 みんなの図書館 (398), 33-41, 2010-06; 中学生へ出前ストーリーテリング(下)これまでの体験を通して思うこと; 山本 宣親 みんなの図書館 (400), 65-72, 2010-08

- 7 本稿第3章は、日本学習社会学会第18回研究大会(2021/8/28-29)にて研究発表を行った内容を加筆修正したものである。

- 8 図書館用語辞典編集委員会編. 最新図書館用語大辞典. 柏書房, 2004. p.32

「おはなし」について『最新図書館用語大辞典』では以下の通り説明している：

昔話や創作童話など、自分が感動して他に語り伝えたいと思う物語を覚えて語ること。素ばなし、語り聞かせともいう。語り手と聞き手が対面して、生の声で語り聞かせるのが原則である。そこに語り手と聞き手の感動の共有、感情の交流があり、聞き手の反応が共鳴したとき、おはなしは芸術としてより高まる。公共図書館の児童室・地域文庫・家庭文庫・学校などで、読書への導入手段として用いられている。最近では、テレビなどの機械を通したおはなしも増えているが、これは技術的には高度であり、音響効果も加わって一応興味は引くが、語り手と聞き手との間の交流がない。このことは、子どもに聞かせるおはなしとしては大きな欠陥である。おはなしの起源は古く、人間がことばを生み出して、意思や感情を伝えることができるようになったことまでさかのぼることができよう。その次代にはわれわれの祖先は、歌や踊りまたは散文によって、様々な出来事、部族の歴史、戦争や英雄の話、神話などを語り、それを伝えた。文字が発明され、物語が記録されるようになって、なお語り物は王侯貴族だけでなく、庶民を楽しませ、諸国に広がり伝えられていった。子どもたちはその中で、昔話を楽しみ、昔話の中に生きることの喜びや悲しみを受け取っていった。この昔話は児童文学の原点となり、そこからグリム兄弟やアンデルセンが生まれ、また欧米で児童図書館員に必要な技術とされるストーリーテリングも生まれた。日本では、明治期、巖谷小波が昔話の伝統を自身の創作に受け継ぎ、また口演童話の語法の祖ともなった。現在、日本のおはなしの語法には、ストーリーテリングと口演童話とがあるが、いずれも昔話の伝統を発展させたものといえる

- 9 『図書館情報学用語辞典 第3版』p.127 「ストーリーテリング」について『図書館情報学用語辞典第3版』では以下の通り説明している：

語り手が物語を覚えて、聞き手に語ること。語りの技術は古代から囲炉裏端や焚き火を囲んで受け継がれてきたものであり、特に中世の琵琶法師や吟遊詩人は名高い。図書館では、公共図書館や学校図書館で子どもを対象に図書館員や教師が物語を語ることを指す。日本では、公共図書館で行われるお話会の中で、読み聞かせや紙人形劇とともになされることが多い。いずれも子どもたちに読書に対する興味を持たせることを目的とする点では共通しているが、読み聞かせが本や絵本を書いてある通りに読んで聞かせるのに対し、ストーリーテリングは語り手が自分の言葉に直して語るところにその特徴がある。そのため、同じ物語でも語り手によって違った味わいを持たせることができ、また、聞き手の反応を見ながら語り口を変えていくことも可能である。したがって、専門的な訓練を必要とする場合もあり、東京子ども図書館などで講習会が開かれている

- 10 『最新図書館用語大辞典』p.265-266。「ストーリーテリング」について『最新図書館用語大辞典』では、以下の通り説明している：

物語を覚えて子どもたちに対して語ること。「おはなし」「素ばなし」ともいう。文字を

十分に読めない子どもでも物語を楽しむことができるので、児童図書館・地域文庫・家庭文庫・学校などで、読書への導入手段として用いられる。欧米では児童図書館員の必須な技術として理論化され普及している。日本では、戦前の図書館でも、おはなし会が盛んであったが、理論化がなされなかった。戦後、欧米に学び、児童図書館や文庫に定着した。その意義として、耳から聞くことばを通して物語のイメージを描くことに習熟することは、活字をイメージ化し、物語を楽しむ力を養う。さらに、ことばの美しさやリズムに敏感となり、豊富な語彙と豊かな表現力を体得させる。図書館や文庫では、おはなしの後で本の紹介を行い、読書への導入を図る。また、語り手は子どもの反応から、児童図書の評価の基礎を身に着けることができる。その方法としては、まず話し手が自分の好きな話を選ぶ。次に語るに適しているかどうか、客観的な基準に照合する。すなわち、(1) 起承転結が明確なこと、(2) 登場人物は少なく、(3) 筋に枝葉がなく、(4) 時間的に前後の混乱がなく、(5) 描写が少なく、(6) 適度なテンポで1本の太い線をたどるように組み立てられた物語がよい。これは、昔話の語り口から学んだもので、内容としては、人生を肯定的に見たものであることが必要である。話が決まったら、繰り返し読み、テーマ・筋・雰囲気・登場人物の性格を心に刻みつけ、目の前に絵として浮かべながら覚える。覚えたら小声であっても必ず声を出して練習する。話すときは、一人ひとりに話しかけるよう子どもの顔を見て、ゆっくりはっきり、誠実に語る。殊更な身振りや声色は避け、自分も楽しみながら語る。最後に本の紹介はしても、感想の強要は避けること。プログラムに誌の朗読を加えるのものよい。雰囲気を出すために、おはなしにろうそくを使うこともある。図書館や文庫では、子どもたちは楽しみにしてやってくるので、定期的に行うことが望ましい。できれば、子どもたちが話に集中できるように特別な部屋であることが望ましいが、なくてもよい。人数は、2～3人から多くても30人ぐらいまでが適当である

- 11 前掲『図書館情報学用語辞典 第3版』p.22 「お話会」について同書では以下の通り説明している。

児童図書館で子どもを対象にストーリーテリングを行う集い。お話し会の意義として、子どもに対して読書する素地を作る、本への興味を育てることのほか、図書館員と子どもの関係を育てる、図書館員のストーリーテリングの訓練があげられる。お話し会は、定期的開催し、30分位の時間で、10名から30名ほどの子どもたちに1、2話語るのが一般的であり、詩や指遊び、絵本のストーリーテリングなどを入れることもある。

- 12 前掲『最新図書館用語大辞典』p.32-33. 同書では、「お話会」について以下の通り説明している：

子どもたちを集めておはなしを聞かせる集まりのこと。図書館の子どもに対するサービスの一つとして行われる。また、地域文庫活動の中に取り入れているところも多い。図書館の子どもに対するサービスの中でおはなしを聞かせることは基本的な仕事の一つである。日常的、定期的におはなしの時間が取れることが望ましい。おはなし会の内容は、素ばなしはもちろん、低い年齢の子どもには絵本を使ったおはなし、紙芝居によるおはなし、その他人形劇やペープサートを使ったおはなしなど、子どもたちの集団によっていろいろと変化をもたせたい。図書館で日常的に行う場合、最適な子どもたちの数は、10～30名程度のときだといわれるが、「人数はこのくらいがよい」と枠をはめてしまうことを考えずに、おはなしを伝える手段を様々な検討の中で、それより多い人数が集まった場合でも十分対応できるよう、研究を進めることが必要である。おはなし会は、(1) 子どもと本の世界を自然に楽しく結び付ける手段として、(2) 図書館や図書館員に親しみを持ってもらえる機会として、子どもに対するサービスの中で大きな意味を持つものである。

- 14 松岡享子著. たのしいお話 お話を子どもに. 日本エディタースクール出版部, 1994. 4.10p

- 15 本章は、第18回日本学習社会学会自由研究発表「耳からお話を届けたい—おはなしつむぎの会の活動について—」の内容を加筆修正したものである（日本学習社会学会第18回大会発表要旨集録. 2021.p.54-55p.）

なお、主な参考文献は以下の通り：松本なお子著. これから昔話を語る人へ—語り手入門. 小澤昔ばなし研究, 2012. 35p.; 松岡享子著. たのしいお話 お話を子どもに. 日本エディタースクール出版部, 1994. 4p.10p.